令和元年度　山口大学教育学部附属光中学校　学校評価書（校長　荒瀬浩一）

1　学校教育目標

学校教育目標：知性と共生のひびき合い・関わり合い

○ 学力の充実：小中一貫カリキュラムの磨き上げ　○ 個が育つ：健康と自己形成　○ 集団が育つ：公共の精神の涵養
○ 業務改善：組織と業務のスマート化　○ 環境整備：小中一貫教育の実質化　○ 学校運営協議会と共に：活動と成果の発信

2　現状分析（前年度の評価と課題を踏まえて）

⑴　学力の向上
生徒の学力は，概ね良好な状況にあり，「主体的・対話的で深い学び」の具現化が順調に進んでいる。新学習指導要領の完全実施に向けて，教科・領域全体に渡った底上げとバランスのよい学力の向上について，一層の取組の改善が必要である。

⑵　心の教育の推進
生徒自身の自己肯定感は年々高くなりつつある状況である。しかしながら保護者や教職員からの評価との間に差が見られる項目もあるので，既得の価値観を深まりや広がり，新たな価値観の獲得など，今後も道徳教育を中心とした取組の充実に邁進していきたい。

⑶　健康・安全と体力の向上
通学が広範囲に渡る本校の実情に即して、健康、安全について具体的な提案が必要である。また，SNS・インターネットの利用等についても，家庭と連携した取組が必要である。また，体調不良を訴える生徒が依然多く，改善策が必要である。

⑷　学部・保護者・地域との連携の強化
学部との連携については，学校のニーズと学部のリソースとのマッチングに改善の余地が見られた。附属学校の取組について，年間を通した学部への定期的な情報提供や日常的な連携について改善が必要である。
地域連携については，学校運営協議会の立ち上げが終わり，コミュニティ・スクールとしての歩みが始まった。学校運営・地域連携・地域貢献について，生徒の参画を含めた具体的な取組の蓄積が必要である。

⑸　業務改善の推進
昨年度は，時間短縮の面では一定の成果が見られた。本年度は限られた時間の中で可能な限りの業務の質の維持・向上が図れるよう，一つ一つの業務の意味や必要性について見直しを進め，新しい働き方モデルの構築を目指していく必要がある。

3　本年度重点を置いてめざす成果・特色，取り組むべき課題

○ 授業力，学校教育力の向上を図り、地域にとって必要となる学校づくりを目指す。（学力）（心の教育）（健康・安全と体力）（学部・保護者・地域連携）（業務改善）
○ 小中一貫教育の進化発展を通して、「本校でしかできない学びの体験」を創造する。（学力）（心の教育）（健康・安全と体力）（学部・保護者・地域連携）
○ 業務改善を通して、教職員一人ひとりのライフ・ワーク・バランスを向上させる。（学部・保護者・地域連携）（業務改善）

4　自己評価

評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組（具体的方策）	評価基準	達成度	達成状況の診断・分析
学力の向上	思考力・判断力・表現力を確かなものにする学びの推進	○ 主体的・対話的で深い学びについての実践と情報発信 ○ 生徒に育む資質・能力に特化したカリキュラム開発 ○ 生徒の特性に応じた指導改善	生徒・保護者アンケート（授業関連）の肯定的な回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	3	生徒、保護者アンケートの結果は、肯定的な意見が88．3%であった。前期に比べると後期は生徒、保護者とも肯定的意見が増加しており、今後も向上が期待できる。
	各学年の課題に応じて，保護者と連携して取り組む学力向上策の開発	○ 各学年の課題に応じた家庭学習方法の実践と検証 ○ 生徒に育む資質・能力に応じた家庭学習方法の実践と検証	保護者アンケート（家庭学習・学力）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	1	保護者の肯定的意見は70．7%と低い。前後期ともほぼ同様の傾向であり来年度家庭学習の充実をどのようにして図っていくかは大きな課題であるといえる。
心の教育の推進	道徳科を要としたよりよく判断し，実践しようとする心情の育成	○ 道徳科の授業づくりを通した，生徒の変容の見取りと評価	生徒・保護者・教職員アンケート（道徳科）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	3	全体の肯定的回答は、87．2%であった。教職員が95%に近い回答であったのに対し、生徒・保護者は83%と低く、この傾向は前後期通じて変わらない。
	集団意識を基盤とし，自治と誇りを基軸としたマナーアップ	○ 登下校中や公共の場での態度の価値付けを通した，望ましい集団づくり ○ 生徒の自治的な工夫・改善を通した主体的な生徒会活動の推進	生徒・保護者・教職員アンケート（規範）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	3	肯定的回答は、前後期平均すると87．6%であるが、後期は前期に比べ、各項目とも向上していることがうかがえる。
健康・安全と体力の向上	自らの生活の課題を意識し，工夫しようとする意欲・態度の育成	○ 本校の実態に即した，生徒の自主的活動による食育指導や保健指導を通した，健康的な生活習慣や態度の育成	生徒・保護者アンケート（生活）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	1	生徒・保護者の肯定的回答は76．9%で、前後期にわたり大きな隔たりはない。健康の保持増進についての意識を高める工夫が必要である。
	安全に楽しく運動を楽しめる資質・能力の向上	○ 運動場面を捉えた具体的な安全指導の充実 ○ 保健体育科の授業等を通しての、生活での健康に対する意識の向上	校内・校外での体調不良者の数（前年度同時期比） 4（50%減），3（40%減），2（30%減），1（20%減）	2	体調不良者の数は、前年度同時期比30%減となった。インフルエンザなどの流行期である3月に休校措置がとられたことが影響しているものと思われる。
学部・保護者・地域との連携	学校と学部との連携を密にした教育研究の推進	○ 年間を通した定期的な情報提供及び教育実践研究サイクルの構築	教職員アンケート（学部連携）の肯定的回答 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	1	教職員の回答は60．9%と低く、さらに後期は前期に比べて肯定的回答が10ポイント近く減少した。学部との連携については、今後も大きな課題であるが、附属校としての強みでもあり改善に努めたい
	学校と保護者，保護者と保護者のネットワークづくり	○ 学校webページを活用した各種情報発信の充実 ○ 非常変災等，学校の危機管理に関する共通理解と訓練の充実 ○ PTA，おやじの会への参加を通した保護者同士の絆づくり	保護者アンケート（PTA 等） 4（90%以上），3（85%以上），2（80%以上），1（80%未満）	1	保護者の回答は64．4%と低い。特に後期は、学校からの情報発信の頻度、精度については改善されてきたが保護者同士のネットワーク構築に課題が見られた。来期に向けて改善を期したい。
	附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくり	○ 学校運営協議会準備委員会の熟議による，コミュニティ・スクールの推進 ○ 生徒の参画によるコミュニティ・スクール機能の強化	4（生徒が参画した地域との取組），3（生徒が参画した学校運営協議会との活動），2（学校運営協議会の提案による新たな取組），1（学校運営協議会での学校運営に関する熟議）	2	本年度は、生徒が参画した学校運営協議会の活動を目指したものの、休校措置により実現できなかった。来年度以降の課題としたい。
業務改善	業務の見直しと効率化を通した働き方の改善	○ 教職員個々の超過勤務時間減への意識付け ○ 小中の同僚性の向上，組織内ネットワークの強化による業務の効率化	月あたりにおける職員の平均超過時間（昨年同時期比） 4（10 時間減），3（5 時間減），2（ 2 時間減），1（0 時間減）	4	昨年度と比較すると、一人当たりの月平均超過勤務時間は 10 時間減を達成することができた。来年度はさらに業務改善に努めていきたい

5　学校関係者評価

取組状況に関する意見・要望等	評価
授業については日頃から教員個々の工夫が感じられ、子どもの学力も着実についているように思う。	4
評価基準が高すぎる感がある。公立校と比べて、大変よくやっているように思う。	2
職員の意欲の高さはひしひしと感じる。教科の特性上、即効性はないが、生徒個々には十分響いていると思う。	4
交通ルールの徹底など、地域における子どもたちの姿は素晴らしいと思う。	3
ゲーム依存などの解消のため、CSでのルール作りなど子どもを巻き込んだ活動を企画するとよい。	2
休校により、インフルエンザの流行が押さえられた形であるが、夏期の体調不良者の増加など課題は多い。	2
大学と連携してどんなことができるか、職員の側からアイデアを提示する必要がある。	1
難しさを感じている。活動がどうしても一部の人に偏ってしまう。何らかのつながりを持てるきっかけがあるとよい。	2
本年度は立ち上げの年であり、一定の実績を残せた。来年度以降、年次的・計画的に進めていくべきである。	2
時短の影響が子どもの教育に出ることは本末転倒。学校の本来の役割を再考してほしい。	2

6　学校評価の総括（取組の成果・次年度への改善策）

＜取組の成果＞
・学校運営協議会が正式にスタートし、学校運営全般を通じて、様々なアドバイスを受けることができた。特に第 4 回協議会での「熟議」は、教職員とも共有するなど大変有意義な取組であり、来年度以降も是非継続していきたいと考えている。
・業務改善が進み、教職員の意識も向上してきており、平均超過勤務時間の減少につながっている。今後は、小中一貫校としてさらに業務改善に努めたい。
・生徒の生活全般については、年度が進むにつれて落ち着いてきており、その様子が評価にも現れてきている。

＜次年度への改善策＞
・家庭学習の充実は急務である。現在小中教務部が進めている「自学ノート」等の取組を浸透させ子供が進んで家庭学習に取り組む雰囲気を醸成させていきたい。
・保護者のつながりについては、従来の中学校単独による PTA 活動に加え、「光学園」としての小中 PTA の連携について動きをつけることができた。次年度は本年度の取組をもとに、さらにどのような連携が可能であるか、小中の PTA 役員を中心に模索していきたい。
・学部との連携については、学校運営協議会でも附属の強みとしてぜひ大切にしてほしいという要望を受けている。各教科とも研究活動を行う上で、学部の知見はたいへん有用であることから、積極的な交流や相互の関連を深め、学部との距離的・心理的な垣根を払った協力関係を構築していく必要がある。
・健康、食育については、「小中合同学校保健委員会」における中学生の参加、ならびに保護者の参加増など、今後啓発活動を一層強化していく中で、健康に対する意識の高揚を図っていきたい。